

## スクリヤービンの幻想曲に関する一考察

教科・領域教育専攻  
芸術系（音楽）コース  
上田 泰子

指導教官 森 正

### はじめに

アレクサンドル・ニコラエヴィチ・スクリヤービン (Alexander Nikolayevich Scriabin, 1872-1915) の音楽作品の特徴は、調性崩壊に深く関与した前衛的な和声語法と、ロシア象徴主義に強く影響された神秘主義的な音楽観にあると言われており、さまざまな角度から数々の研究がなされている。しかし、これらの特徴が見られるのは、神秘主義思想への傾倒を深めた中期以降においてであり、それ以前の初期作品についてはほとんど研究がなされていない。

スクリヤービンは、ロマン派風なピアノ小品を書くことで創作の第一歩を踏み出し、独自の音楽書法を模索したと言われている。初期作品の中には、習作的な作品が多いのも事実であるが、その音楽書法は確実に発展を遂げ、中期以降における特徴の出現に大きな役割を担っていたと考えられる。

スクリヤービンは創作活動の初期において、“幻想”の名を持つピアノ曲を、独奏曲として3曲、2台のピアノのための楽曲として1曲作曲しており、ピアノ独奏曲の3曲は初期における開始時点、中間時点、および終末時点にそれぞれ該当する。

本研究では、ピアノ独奏曲に焦点を絞り、初期開始時点に該当する『幻想ソナタ 嬰ト短調 [作品番号なし]』(1886年作曲)、中間時点に該当する『ピアノソナタ第2番 嬰ト短調 作品19

『幻想ソナタ』(1892～1897年作曲)、および終末時点に該当する『幻想曲 ロ短調 作品28』(1900～1901年作曲)をいくつかの視点から比較、検討することによって、スクリヤービンの初期作品における音楽書法の発展過程を明らかにすることを目的とする。

### 論文の概要

第1章では、“幻想”の概念と音楽史におけるスクリヤービンの幻想曲の位置付けを探った。その結果、前衛的な作曲家として知られるスクリヤービンは、長い初期創作期間をロマン派の強い影響下で活動し、幻想曲をはじめとする彼の初期ピアノ作品は、ロマン派ピアノ音楽とそれ以降の近現代ピアノ音楽とをつなぐ結節点であったことが明らかになった。

第2章では、既述の3曲を複数の視点から比較、検討することにより、スクリヤービンの初期作品における音楽書法の発展過程を明らかにした。

第1節では、スクリヤービンはピアノの限界に挑戦し、オーケストラと同等の表現効果をピアノに持たせるような作曲上の工夫をしているとし、音域の拡大、音の厚み、および持続音に着目して既述の3曲を比較し、発展を検討した。その結果、オーケストラへの憧憬がもたらしたそれらの工夫は、スクリヤービンの初期創作期間を通して確実に発展を遂げ、彼独自のピアノ

書法の確立に多大な影響を与えたと思われる。

第2節では、スクリャービンの音楽における特色であるしなやかなテンポの揺れが、演奏者、および聴取者の私的な時間感覚に影響を与えており、それはスクリャービンが彼の私的時間を楽譜に表現した工夫の結果であるとした。そのような工夫として、三連符、付点音符、ポリリズム、およびフレーズの交差に着目し、発展を検討した。三連符は、音楽によって生じた聴取者の感情の揺れに同調しやすく、その効果を狙って三連符、および奇数個の音で構成される連符を使用している場合が多いとした。付点音符については、付点音符と対で現われる尖鋭なリズムが聴取者の注意を引き付ける効果を持つため、スクリャービンはそこに大きな価値を見出していたとした。ポリリズムについては、並んだりリズムが複雑で互いに割り切れなくなるほど、各々のリズムを厳密に把握することは困難となり、基本拍内における厳密な分割が不可能になる。基本拍が大きくなるに伴い、許容される微小な速度変化、および発音のタイミングの幅も大きくなり、それが演奏者、および聴取者の時間感覚の揺れにつながっているととした。フレーズの交差については、小節線が明示している拍子の開始点とフレーズの開始点とが一致していないため、演奏者、および聴取者の拍節感を乱し、時間感覚の揺らぎにつながっているととした。演奏者、および聴取者の時間感覚に影響を与えるそれらの作曲上の工夫は、曲想に沿う形で様々に用いられ、確実に発展を遂げていることが明らかになった。

## おわりに

本研究は既成の枠からの脱出をテーマとしている。第1章で述べたとおり、初期創作期間に

おけるスクリャービンはロマン派の域をまだ脱出しきれていない。しかし、第2章では、既成の枠からの脱出の過程を垣間見ることができる。すなわち、第1節で述べたオーケストラへの憧憬は、ピアノの限界からの脱出であり、さらに、第2節で述べた時間感覚の揺らぎは、時間的な拘束からの脱出と見ることができるであろう。

中期以降に見られる前衛的な作風に至るには、その準備段階が不可欠であり、その準備段階においても発展は見られるはずである、という考えを出発点にこの研究を開始したが、初期におけるスクリャービンはあらゆる面において既成の枠からの脱出を目指し、確実にその音楽書法を発展させていたことが本研究で明らかになった。そして、その姿勢が中期以降に開花した前衛的な作風につながったと思われる。

本研究においては触れなかったが、幻想曲以外の初期作品、スクリャービンが影響を受けた作曲家や思想との関連、および和声的研究など、初期スクリャービンには研究の余地が多く存在すると思われる。本研究をきっかけとして、今後もスクリャービンの初期作品を様々な視点から研究していきたい。

## 【学位関連演奏曲目：ピアノ独奏】

アレクサンドル・ニコラエヴィチ・スクリャービン作曲

Alexander Nikolayevich Skryabin

ピアノソナタ第2番 嬰ト短調 作品19 《幻想ソナタ》  
(Sonate-Fantasie Nr. 2 gis-moll op. 19)

第1楽章 アンダンテ (Andante)

第2楽章 プレスト (Presto)

幻想曲 ロ短調 作品28

(Fantasie h-moll op. 28)